

オンラインシステムを活用したペアレント・メンター交流型研修会の成果と課題

2 地域での試行的取組を通して

柳澤亜希子

Merits and Challenges of Workshop for Parent Mentors Using Interactive Online Systems:
An Implementation in Two Regions

YANAGISAWA Akiko

(Received October 21, 2024)

キーワード：ペアレント・メンター オンラインシステム 交流型研修会

1. 問題の所在と目的

親同士の支え合いによる自助的な支援である「親による親への支援」は、「Parent to Parent」「Parent Mentor」「Peer Support」と称される。海外では、障害や疾患のある子どもの親に対する親による支援が実施されており、その効果が報告されている。「親による親への支援」の効果としては、相談した親が、①境遇が似た親と話することで自身の考え方や感情が通常のものであると感じることができる、②子育てに関する具体的な情報を得ることができる、③将来の見通しがもてる、④同じ経験を共有することで孤独感が払拭される、⑤所属意識を感じられるといったように、同じ立場の親からの支援が、相談者である親にもたらす肯定的な効果が報告されている。しかしながら、支援を提供している親が、相談支援活動を行う中で有するニーズや直面している問題に対して、どのような支援を提供すべきかといった視点から検討した研究は少ない。

障害等のある子どもを養育する親が同じ立場の親を支援することの意義は、我が国においても認識されており、こうした活動はこれまで親の会の活動の中で実施してきた。発達障害のある子どもの親による支援については、2005年に日本自閉症協会が米国の TEACCH プログラムのペアレント・メンタープログラムを導入し、発達障害のある子どもを養育している親が相談支援活動に必要な基本的な知識やスキルを有して同じ立場の親に支援を提供する「ペアレント・メンター」がある。ペアレント・メンター（以下、メンター）は、2010年に厚生労働省が発達障害者支援体制整備事業として位置付けて開始された取組である。現在、都道府県・指定都市及び市区町村の自治体や発達障害者支援センター、ペアレント・メンター事業を委託された親の会を中心としてメンターの養成が進められており、地域の発達障害のある子どもの家族への支援資源の1つとして活躍が期待されている。メンターによる親支援の活動としては、発達障害者支援センター等が企画するグループ相談会への参加、専門家によるペアレント・トレーニングのスタッフとしての参加、サポートブック作成支援、メンターによる子育て体験談の講演等が行われている（原口・井上・山口・神尾, 2015）。メンターによる相談支援活動は、子どもが発達障害と診断された親や子育てに悩みを抱える親に対し、共感的なサポートと地域における支援資源に関する情報提供という点で専門家とは違った面での助けになる（原口・加藤・井上, 2015）。このようなメンターの役割に対する期待の高まりと本事業の拡大に伴い、メンターが抱える様々な問題が明らかとなっている。

特定非営利活動法人日本ペアレント・メンター研究会（2018）は、メンターが直面する問題として「時間的問題」「能力的問題」「心理的問題」を挙げている。「時間的な問題」としては、仕事との両立によってメンター活動や研修への参加の日程調整、障害のある我が子の予定等との調整の難しさが指摘されている。

「能力的問題」については、メンターは専門職ではなく親としての立場で支援を提供する存在であるが、それ以上の役割を求められる状況が生じている。「心理的問題」については、メンターは支援を行う立場であるとともに支援を受ける側でもある複合的な立場であるが、メンター自身にその自覚が薄れていったり、メンター活動の依頼先や相談者側にその意識が欠如していたりすることが懸念されている。こうした問題は、メンター活動の充実のために不可欠であるメンターを対象とした研修への参加を阻んだり、メンター活動を行うことに負担感をもたらしたりする一因になる可能性がある。また、メンターの居住地域によっては交通の利便性の問題があり、研修会場までの移動に要する時間の確保の難しさ等から障害のある子どもを養育しているメンターが、継続的に研修に参加することが困難な状況も少なからず存在している。メンターが必要な研修を受講する上で生じうる課題を解消する1つの方法として、物理的な距離を超えてリアルタイムで研修を行うことができるZoom等のアプリを用いたオンラインシステムの活用が挙げられる。

本実践では、メンター事業を実施している2つの地域の協力を得て、オンラインシステムを活用したメンター同士の交流型研修会を試行的に企画・実施してもらい、本研修会に参加したメンターへの事後アンケートを通してオンラインシステムを活用した研修会の効果と課題を把握することを目的とした。

2. 方法

2-1 協力地域と参加者

本実践は、メンター事業を実施している発達障害者支援センター（以下、「A地域」と記す）とメンター事業を委託されている親の会（以下、「B地域」と記す）の協力を得て実施した。両地域においてメンターとして登録して相談支援活動に従事している発達障害のある子どもを養育している保護者を主な対象とした。ただし、B地域の参加者については、メンターの養成研修を受講しておらずメンターとして登録されていないが、所属する親の会の活動で相談支援活動に従事している保護者が含まれていた。表1と表2に各地域の各回における参加者数を示した。

2-2 オンラインによる交流型研修会の実施手続き

A地域とB地域が実施しているメンター養成後の研修（以下、「フォローアップ研修」と記す）の一環として、オンラインによる交流型研修会（以下、「交流型研修会」と記す）を企画・実施してもらった。交流型研修会で取り上げる内容は、両地域のメンター事業運営担当者（代表者）から研修に関する要望を聴取し協議した上でメンター事業運営担当者の方で実施時期や実施内容を計画してもらった。

交流型研修会の実施時期は、A地域では、メンターである保護者が比較的参加しやすいと考えられる週末の午後に2時間設定で実施することとした。B地域では、メンターを含む保護者が参考している親の会の理事会の後に1～2時間設定で実施することとした。

交流型研修会の実施に際しては、両地域のメンター事業運営担当者（代表者）から登録メンターに交流型研修会の実施について周知・案内してもらい、参加者を募ってもらった。

2-3 交流型研修会のプログラム

両地域ともに、Zoomのアプリを用いた。表1にA地域、表2にB地域での交流型研修会の実施時期と実施内容を示した。

A地域においては、交流型研修会への参加申し込み時に参加者から協議したい内容を募り、テーマを設定した。実施時期によって参加者が異なる可能性があるため、いずれの回も冒頭は参加者の自己紹介から開始した。第1回目は初回であるため、参加申し込み者から要望のあったテーマごとにグループを編成し（1グループにつき4～5名で編成）、Zoomのブレイクアウト機能を使用して意見交換を行った。グループ別協議では、第2回目以降もブレイクアウト機能を使用した。各グループには、メンター事業を担当している発達障害者支援センターのスタッフが1名ずつファシリテーター役として参加した。

第2回目以降は、事後アンケートの結果を参考にして交流型研修会で取り上げるテーマや内容を検討した。第2回目は、前半は現役メンター2名から相談支援活動で心掛けていることや工夫、困った時の対処方法等について発表してもらい、後半は前半の発表を踏まえてグループ別で意見交換を行った。

第3回目は、メンター運営事業担当者の方で2つのテーマを設定し、グループ別でそのテーマについて意

見交換した上で、フリートークとして自由に意見交換や情報交換をしてもらった。

第4回目は、他地域（他県）のメンターとの合同交流会を企画した。前半は各地域のメンター事業運営担当者からそれぞれの地域のメンター事業の取組について紹介をしてもらった。後半はブレイクアウト機能を用いて前半の取組紹介の内容を踏まえて各グループで意見交換をしてもらい、その後、全参加者が再度参集して各グループで話題になったことや協議したこと等を報告してもらった。この時間は、第5回目でも同様に設けた。

第5回目は、著者が実施した調査結果を基に「全国のメンター活動の状況について」と題して情報提供を行い、その後グループ別での情報・意見交換を行った。

第6回目以降は、これまでの実施形態を変更し、月1～2回の頻度で4ヶ月間に渡って「ざっくばらんにオンライン茶話会」と称して参加者が都合の良い日時に参加する形態に変更した。いずれの日時も1～2名のメンター事業運営担当スタッフが常駐してファシリテーター役を務め、適宜、助言や情報提供を行った。この期間は、メンター事業運営担当が話し合うテーマを決めず、その日に集った参加者から出された話題や相談内容を基に情報・意見交換を行った。第6回目からこの形態に変更したのは、参加者メンバーが固定化してきたためとメンターが参加しやすい日時を探るためであった。なお、本稿では、第5回目までの取組について言及した。

表1 A地域における交流型研修会の企画・実施内容

実施時期	第1回：20XY年12月 第2回：20XY+1年7月 第3回：20XY+2年1月 第4回：20XY+2年7月（他地域との合同交流会） 第5回：20XY+3年2月 第6回以降：20XY+3年7月～10月（この期間に計6回開催）
参加者数	第1回：15名 第2回：13名 第3回：7名 第4回：9名（他地域からは5名のメンターが参加。計14名参加） 第5回：9名 第6回以降：延べ15名（うち3名は複数回参加）
実施内容	第1回：テーマ別によるメンター同士の意見交換 第2回：現役メンター（2名）による事例発表、メンター同士の意見交換 第3回：テーマトーク（「私のデビュー：新人さんへのメッセージ」、「心に残っている相談」とフリートークによるメンター同士の意見交換 第4回：他地域メンターとの合同交流会（各地域のメンター事業の取組紹介、グループ別協議（含む全体共有）） 第5回：外部講師による情報提供「全国のメンター活動の状況について」、グループ別協議（含む全体共有） 第6回以降：ざっくばらんにオンライン茶話会（当日の参加者から提示された話題について情報・意見交換。必要に応じてA地域メンター事業運営スタッフ等のファシリテーターから情報提供・助言）

他方、メンター事業が親の会に委託されているB地域では、A地域のように研修会をコーディネートしてくれる専門機関のスタッフがいないため、親の会の理事会のメンバーが中心となって研修会の内容を検討・企画した。親の会で相談支援活動に従事しているがメンター養成研修未受講の保護者がいるため、そうした保護者にとっても学びとなり、また、養成研修受講以降フォローアップ研修が実施されていない現役メンターが基本事項を学び直すことができる内容を取り上げることにした。

第1回目は、発達障害についての基本事項に関する2本の講義動画の視聴と現役メンターによる相談対応のデモンストレーションを行った。

第2回目は、ペアレント・メンターの役割や留意事項、障害のある子どもの親としての体験を語ることの意義に関する講義動画を視聴し、参加者同士で意見交換を行った。

第3回目は、地域の相談機関等の支援リソースについて出し合い、一覧表にまとめていく活動を行った。

第4回目は、他地域（他県）のメンターとの合同交流会を行った。前半は各地域のメンター事業運営担当者（代表者）がメンター活動の状況について発表し、ブレイクアウト機能を使用してグループ別に情報交換を行った。

第5回目と第6回目は、年度が変わり理事会の役員が変更したため、第3回目と第6回目と同様のプログラムを実施した。第6回目に関しては、第3回目で整理・見直しを行った地域リソースの一覧のアップデートを行った。

第7回目は、ペアレント・メンター、ペアレント・トレーニング、ペアレント・プログラムそれぞれの役割と活動の違いを知りたいとの要望が挙がったため、外部講師によるオンライン講義を実施した。この回は、参加者同士で意見交換は行わず講義聴講のみであった。

表2 B地域における交流型研修会の企画・実施内容

実施時期	第1回：20XY + 1年9月 第2回：20XY + 1年10月 第3回：20XY + 1年11月 第4回：20XY + 2年2月（他地域との合同交流会） 第5回：20XY + 2年11月 第6回：20XY + 2年12月 第7回：20XY + 3年3月
参加者数	第1回：13名 第2回：13名 第3回：13名 第4回：15名（他地域からは8名のメンターが参加。計23名） 第5回：11名 第6回：11名 第7回：13名
実施内容	第1回：講義動画「発達障害の考え方、関わり方」視聴、現役メンターによる相談対応のデモンストレーション 第2回：講義動画「ペアレント・メンターが体験を語ることの意義」視聴、メンター同士の意見交換 第3回：B地域の支援リソースの整理と見直し 第4回：他地域メンターとの合同交流会（各地域のメンター活動の取組紹介と情報交換） 第5回：講義動画「ペアレント・メンターが体験を語ることの意義」視聴、メンター同士の意見交換 第6回：B地域の支援リソースの整理と見直し 第7回：外部講師によるオンライン講義「ペアレント・トレーニングとペアレント・プログラムを学ぼう」

2-4 交流型研修会事後アンケートの実施

2-4-1 アンケート調査の実施手続きと実施期間

A地域、B地域とともにメンター事業運営担当者（代表者）を介して交流型研修会終了後に事後アンケートを実施してもらった。アンケート用紙をメンター事業運営担当者（代表者）にメールで送付または郵送し、参加者に配布してもらった。回答されたアンケートはメンター事業運営担当者（代表者）が回収し、著者に返送してもらった。

2-4-2 事後アンケート調査項目

事後アンケートでは、以下の内容を尋ねた。一部項目（①、⑤、⑥）については、A 地域と B 地域で異なる質問を行った。①参加者の属性（a. 年代、b. メンター活動経験の有無、c.（A 地域には）リーダーメンターの経験の有無（選択式）、②交流型研修会に参加した理由（選択式、複数回答可）、③交流型研修会の時間設定の適切さ（5 件法）、④対面形式による交流会と比較してのオンラインによる交流型研修の印象（選択式、複数回答可）⑤交流型研修会に参加することの有益性【⑤-1. 地域には相談支援活動に役立つ情報の取得（3 件法）、⑤-2. B 地域には交流型研修会で取り上げた内容の参考度（5 件法）を尋ねた】、⑥メンター同士の交流会を行うことの意義（5 件法）（ただし、B 地域には交流型研修会への参加の満足度（5 件法）を尋ねた）、⑦今後交流型研修会で取り上げてほしいテーマや内容について尋ねた。調査項目⑦は、A 地域には初回のアンケートでは自由記述で回答を求め、2 回目以降は初回の回答を踏まえて項目立てし選択式（複数回答可）で尋ねた。B 地域には、いずれの回も自由記述で回答を求めた。

2-5 倫理的配慮

本実践は、前所属機関（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）の倫理審査委員会（2020-07）と山口大学人一般研究審査委員会（2021-090-01）の承認を得て実施した。研究協力の承諾を得た A 地域と B 地域のメンター事業運営機関（団体）の担当者（代表者）から登録しているメンター全員に研究協力について周知してもらった。本実践で実施した交流型研修会は、A 地域と B 地域のメンター事業の活動に組み入れて行うものであったため、登録しているメンター全員に本研究の目的と交流型研修会実施後のアンケート調査への協力について文書で説明し、承諾を得た。その際、収集したデータの取り扱いや個人が特定される情報は公表しないこと等を同文書で説明した。また、交流型研修会への参加は任意であること、参加しないことで今後のメンター活動に不利益が生じることはないこと、研究への協力に承諾しておらずデータ収集の対象とならなくても交流型研修会への参加は自由であることを伝えた。

アンケート調査用紙には、事後アンケートへの回答は任意であることを示し、回答結果の提供の承諾の有無を確認した。事後アンケートの集計結果は、A 地域と B 地域の今後のメンター事業の企画・運営の参考資料としてもらうため、その都度まとめ、速やかにメンター事業運営担当者（代表者）にフィードバックした。

3. 結果

3-1 交流型研修会への参加者の属性

A 地域、B 地域ともに参加者の年代は、40 代以上であった。A 地域では全ての回にわたり、主に「50 代」のメンターが参加していた。地域規模が大きく各地区にリーダーメンターを配置している A 地域では、いずれの回も参加者の半数がリーダーメンターであった。その一方で、メンターとして登録しているものの活動経験がない参加者が、いずれの回も一定数見られた。B 地域においては、「50 代」と「60 代以降」のメンターの参加が主であり、特に「60 代以降」のメンターが占めている傾向にあった。B 地域では、いずれの回もメンター養成研修が未受講である者が数名参加していた。

3-2 交流型研修会に参加した理由

A 地域において、第 1 回目の参加理由としては、「他地域の状況や活動を知りたかった」（15 名中 5 名）と「他の地域の方と交流を持ちたかった」（15 名中 4 名）が挙げられた。その他には、「情報収集」「久々に仲間に会って話を聞いたかった」「スキルアップ」（いずれも各 2 名）、「リーダーメンターであるため」「メンター事業に携わっているから」（いずれも各 1 名）が挙げられた。第 2 回目以降では、「今回のプログラムに关心があったため」「相談支援活動のスキルアップのため」「他のメンターの相談支援活動に対する考え方や思いを知りたかったため」「他地域のメンターと知り合いになりたかったため」「リーダーメンターとして情報収集するため」「その他」を選択肢として示し、回答を求めた。その結果、最も多く挙がった理由として、第 2 回目と第 3 回目は「今回のプログラムに关心があったため」（第 2 回目：13 名中 10 名、第 3 回目：7 名中 5 名）、第 4 回目は「相談支援活動のスキルアップのため」（9 名中 8 名）、第 5 回目は「他のメンターの相談支援活動に対する考え方や思いを知りたかったため」（9 名中 8 名）であった。

3-3 対面形式による交流会と比較してのオンラインによる交流型研修会の印象

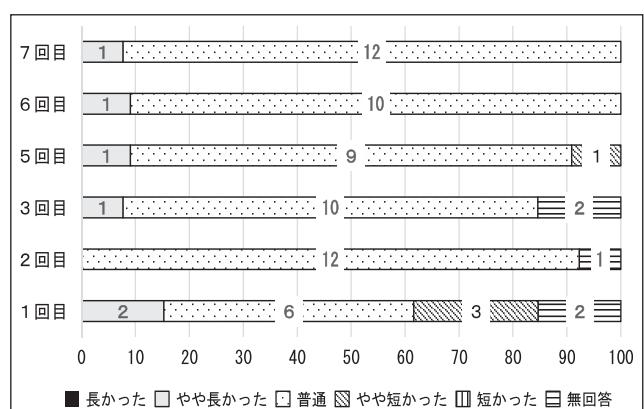
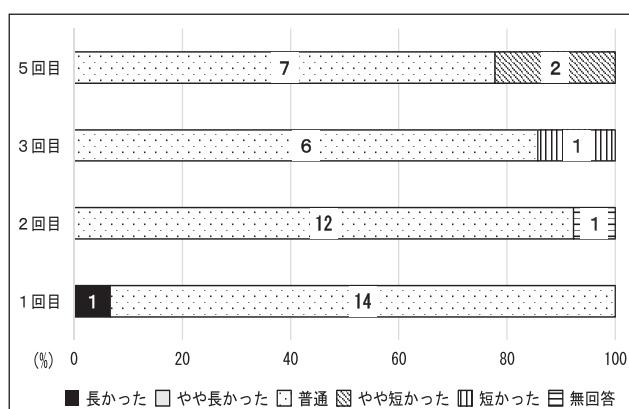
オンラインシステムを用いた交流型研修会の印象について、いずれの回も「特に違いを感じない」との回答が見られた。一方で、一部の参加者には「画面上では相手の反応がわかりにくかった」「ネットの接続状態が不安定になり集中できなかった」「周囲が気になり落ち着かなかった」「コメントするタイミングがつかみにくかった」といった意見が挙げられた。特に第1回目は「その他」として「時折、音声が聞こえづらくなかった」「顔出しZOOMが初めてで緊張した」「対面の方が話しやすい」「遠慮がちになる」「オンラインで話すことはなかなか慣れない」といった様々な意見が示された。その一方で、「ミュートやカメラをオフにできるのはいい」「会場への移動なしで参加できるのはよい」「ZOOMだからこそ皆の表情が見られたり個人でチャットできたり、息子の預け先を探さずに参加できた」といったコメントが見られた。第2回目以降は、「その他」として「参加者を身近に感じられてとても良かった」「対面とは違う良さがある」「参加しやすい」「時間を有効活用できてありがたい」「天候などに関係なく集まる」といった回答が挙げられた。

3-4 交流型研修会の設定時間

交流型研修会の設定時間について、「長かった」「やや長かった」「普通」「やや短かった」「短かった」の5件法で尋ねた。

A 地域では、毎回2時間設定で実施した。いずれの回も「普通」が大半を占めていた。3回目と5回目では、「やや短かった」「短かった」と回答した者が見られた（図1）。

B 地域では、1時間～2時間設定で実施した。A 地域と同様にいずれの回も「普通」との回答が大半を占めたが、第1回目は「やや長かった」と感じた者もいれば、「やや短かった」と感じた者もいた（図2）。



注) グラフ上の数値は、各回の参加者数(実数)を示している。以下、図3～図6も同様。

図1 交流型研修会の時間設定の適切さ (A 地域)

図2 交流型研修会の時間設定の適切さ (B 地域)

3-5 交流型研修会に参加することの有益性

A 地域には、交流型研修会に参加して役立つ情報が得られたかどうかを尋ねた。いずれの回も「役立つ情報が得られた」と回答した者が大半であった（図3）。

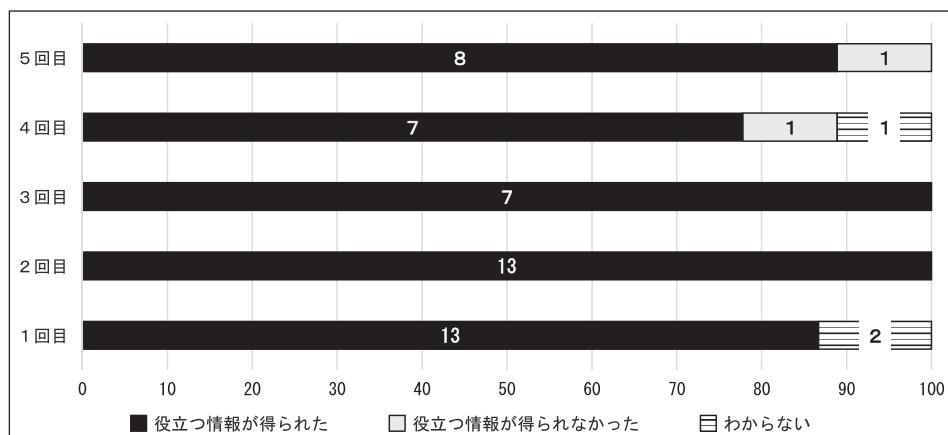


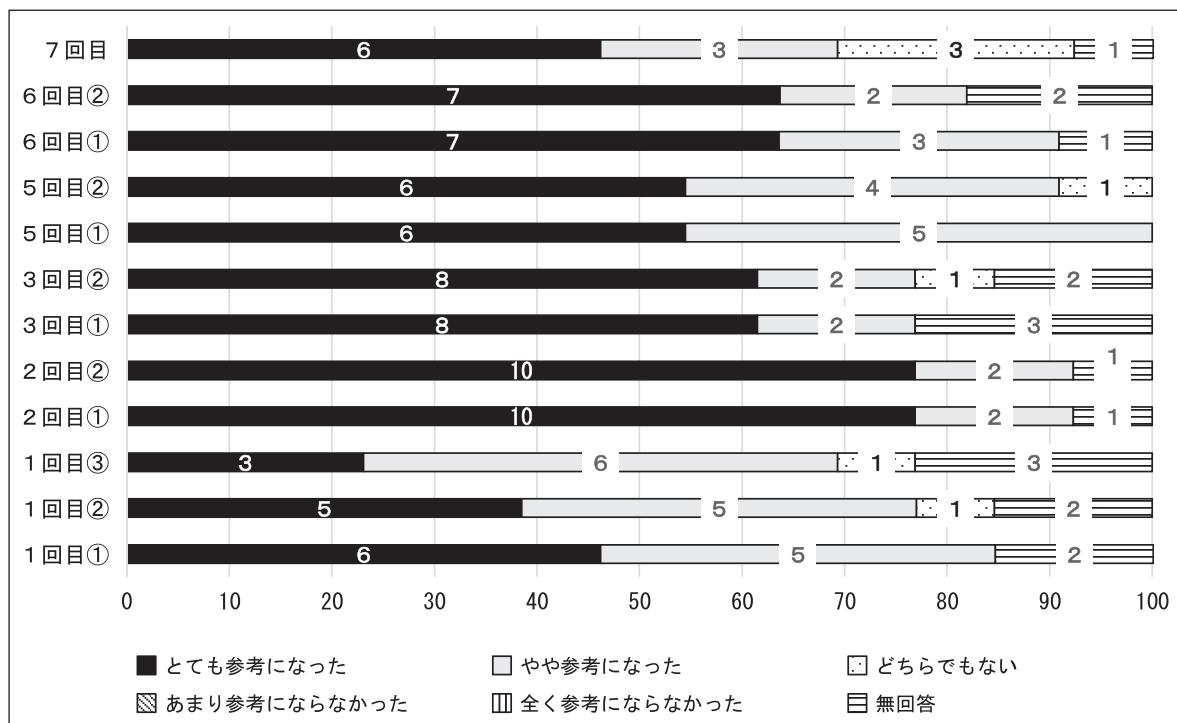
図3 交流型研修会に参加することの有益性 (A 地域)

「役立つ情報が得られた」と回答した参加者にその内容を尋ねた。表3に、各回で挙げられた回答内容の例を示した。役立つと感じた情報としては、「各地域でのペアレント・メンターについての周知方法や広報」といった【メンターについての周知や啓発方法】、「メンター相談会の開催方法」「各地域のメンターの仕組みや雰囲気、派遣状況」「地域による活動内容の違い」「支援体制など地域差がある」といった【各地域の特異性】、「面談内容についてのメンターの悩みどころや困り感」「同じような悩みやジレンマを抱えながら活動していること」といった【メンターとしての悩みや困りごとの共感】、「メンターの心構え、傾聴の重要さ」「安心してもらえるような言葉がけやヒントなどの雰囲気づくりの大切さ」「メンターが話しそぎてしまうときの対応」「メンター自身が子育ての失敗談を話すこと」等といった【相談対応のコツやノウハウ】が挙げられた。

表3 交流型研修会に参加して得られた役立つ情報（A 地域）

実施回	役立つ情報の内容の回答例
第1回	<ul style="list-style-type: none"> ・各地域でのペアレント・メンターについての周知方法や広報 ・メンター相談会の開催方法（対面とオンライン） ・メンター事業の果たす役割 ・各地域のメンターの仕組みや雰囲気、派遣状況
第2回	<ul style="list-style-type: none"> ・面談内容についてのメンターの悩みどころや困り感 ・同じような悩みやジレンマを抱えながら活動していること ・他の地域のメンター活動の方法（集団面談、グループ相談） ・複数のメンターが対応することで相談の幅が広がる ・メンターの心構え、傾聴の重要さ ・（相談者に）安心してもらえるような言葉がけやヒントなどの雰囲気づくりの大切さ ・（メンターの）子育ての失敗談を話すことで同じ立場であることが伝わる ・相談者の状況を事前に相談して打ち合わせをして臨むことで、メンターの緊張がほぐれる ・相談の始まり方と終わり方の大切さ ・メンターが話しそぎてしまうときの対応
第3回	<ul style="list-style-type: none"> ・年代が違うメンターとの組み合わせでの派遣活動 ・グループ相談時の決まりごとを皆で読み上げる ・メンター自身が子育ての失敗談を話すこと ・地域によってメンターに提供される活動の場が違うこと
第4回	<ul style="list-style-type: none"> ・地域による活動内容の違い ・支援体制など地域差がある
第5回	<ul style="list-style-type: none"> ・町村独自の活動をしている地域があること ・メンター活動を行う上での課題は全国的に似ていること ・啓発には地道な活動を継続することが大切であること ・共感する力、相談に来た方に少しでも元気になってもらえる傾聴の仕方 ・メンターを知ってもらう、きっかけづくりのヒント ・他のメンターさんのメンター活動に対する心情

B 地域には、交流型研修会で取り上げた内容がメンターとしての活動において参考になったかどうかを5件法で尋ねた（図4）。発達障害の基本事項に関する研修動画2本と現役メンターによる相談対応のデモンストレーションを行った第1回目は、「とても参考になった」「やや参考になった」との回答が示された。第2回目以降も同様の傾向であったが、「ペアレント・メンターが体験を語ることの意義」の講義動画の視聴とメンター同士の意見交換を行った第2回目は、「とても参考になった」との回答が目立った。



注1) 1回目の①は「発達障害の考え方」の講義動画視聴、②は「発達障害の関り方」の講義動画視聴、③は相談対応のデモンストレーションを示す。

注2) 2回目の①は「ペアレント・メンターが体験を語ることの意義」の講義動画視聴、②は「メンター同士の意見交換」を示す。

注3) 3回目の①は「地域の支援リソースの整理と見直し」、②は「メンター同士の意見交換」を示す。

注4) 5回目の①と②は2回目と同様、6回目の①と②は3回目と同様の内容である。

注5) 4回目の他地域との合同交流会では、本質問項目について尋ねていない。

図4 交流型研修会に参加することの有益性 (B 地域)

3-6 メンター同士の交流会を行うことの意義

A 地域には、メンター同士の交流会の意義を「とても意義がある」「意義がある」「あまり意義がない」「全く意義がない」「判断できない」の 5 件法で尋ねた。第1回目は、「とても意義がある」と「意義がある」が半々であったが、第2回目は「とても意義がある」との回答が占めており、第3回目と第5回目は全員が「とても意義がある」と回答した(図5)。

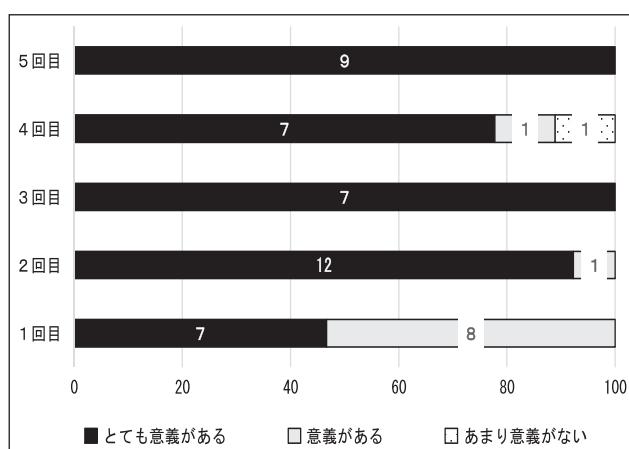


図5 メンター同士の交流会の意義 (A 地域)

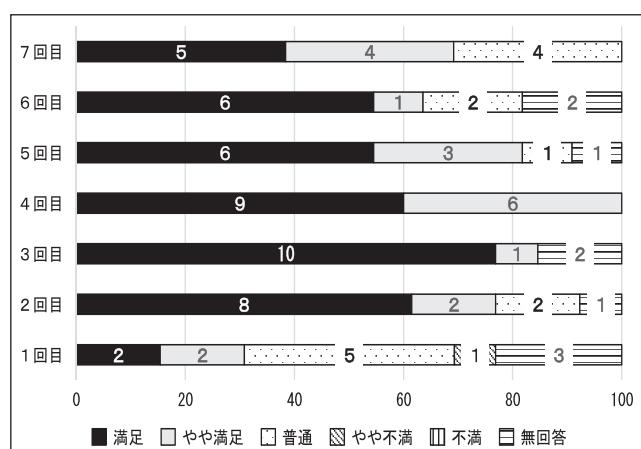


図6 メンター同士の交流会の満足度 (B 地域)

B 地域には、メンター同士の交流会の満足度を「満足」「やや満足」「普通」「やや不満」「不満」の 5 件法で尋ねた。第 1 回目は「普通」が占めていたが、第 2 回目以降は「満足」が占めている傾向にあり、「やや満足」も含めるといずれの回も肯定的に捉えられていた。ただし、第 7 回目は、「普通」が「満足」と「やや満足」とほぼ同等の割合で示された（図 6）。

3-7 今後取り上げてほしいテーマや内容

A 地域では、第 1 回目の事後アンケートの自由記述によると、「事例検討会」や「相談を想定したグループワーク」、「相談内容と対応例」といった【相談対応に関する具体事例】、「(メンターが)相談の中で感じた不安や気持ちの切り替え方」といった【メンターの心理的ケア】、「相談ルートの体系化」「相談者とのマッチング」といった【相談支援活動の運用】が挙げられた。2 回目以降は、初回の回答内容を踏まえて選択肢を設けて尋ねた。その結果、いずれの回も「相談支援活動時に感じている（感じた）不安や困りごとの共有」が挙げられ、次いで「事例検討」と「相談支援活動後の気持ちの切り替え方」が挙げられた。

B 地域では、いずれの回も自由記述で尋ねた。第 1 回目の事後アンケートでは、「今の教育（特別支援学校や特別支援学級等）の現状」「新しい情報や制度のこと」といった【最新情報】、「B 地域ではどういった人たちに相談できるのか。この機関のこの人には得意な分野がある」といったネットワークを知ることができれば嬉しい」といった【地域情報】が挙げられた。2 回目以降は、「親亡き後の見守り支援」「強度行動障害のある本人・家族への支援」「不登校支援」「書字障害の支援」といった【障害のある本人・家族への支援方法】、「リソースブックづくり」「メンターのいない地域についてもリソースをまとめたい」といった【地域リソースの整理】、「より具体的な支援方法やその事例」「事例検討」「傾聴と共感の力をつけるための具体的な方法」といった【相談対応・支援に関する具体事例】、「犯罪に関するような重大な相談に（メンターが）どこまで対応すればよいか」「地域連携」といった【関係機関等との連携】が挙げられた。

4. 考察

メンター事業の運営主体が異なる地域を対象に、オンラインを活用した交流型研修会を試行的に実施した。A 地域、B 地域とも 1~2 時間のプログラムとしたが、時間設定については「普通」との評価が大半であったため、時間的な負担感はそれほどなく参加できたのではないかと考えられる。

専門機関がメンター事業の運営を担当している A 地域での主たる参加者は、各地区のリーダーメンターであった。5 回にわたり交流型研修会を企画・実施したが、リーダーメンターを中心とした固定的なメンバーの参加にとどまり参加者層が広がらず、かつ、参加者数も増えなかった。A 地域は規模が広く移動距離や移動に要する時間を考慮するとオンラインを活用した研修会は有効であると思われたが、必ずしもそうではなかった。東・黒田（2022）は、オンラインのメリットとして移動時間や交通費等がかからない経済性を挙げているが、これらの負担を軽減する方法を導入したからといって必ずしも積極的な研修会への参加に結びつくとは限らないことが示唆された。一方、親の会の理事会後に研修会を実施していた B 地域は、理事会にメンターが出席しているため参加者数に著しい減少は見られず維持されていた。A 地域の主たる参加者がリーダーメンターであったことを考慮すると、研修会までの移動やそれに要する時間、経済面での負担が少ない方法を採用してもメンター活動に関わって明確な役割やそれに伴う動機付けがないと研修会への主体的な参加には結びつきにくいことが推測された。

交流型研修に参加した理由として、A 地域では他地域のメンター事業の状況や活動、他の地域のメンターとの交流を希望する声が挙がったため、2 回目以降はこれらの要望を反映するプログラムを企画した。参加者数の増加にはつながらなかったが、研修会に参加したメンターからは、いずれの回も「役立つ情報が得られた」との肯定的な評価が得られ、参加したメンターにとっては一定の有益性があったと考えられる。役だった情報としては、【メンターについての周知や啓発方法】【各地域の特異性】【メンターとしての悩みや困りごとの共感】【相談対応のコツやノウハウ】が挙げられた。【メンターとしての悩みや困りごとの共感】が挙げられたことから、メンターへの研修においては知識やスキルの伝達に留まるのではなく、相談支援活動に従事しているメンターの不安を払拭するような内容を設けることが必要であると考えられる。メンターが要望したテーマや内容に【メンターの心理的ケア】に関することとして「相談支援活動時に感じている（感じた）不安や困りごとの共有」や「相談支援活動後の気持ちの切り替え方」が挙げられたことからも、これ

に対するメンターのニーズの高さがうかがえ、活動に従事しているメンターの心理面のフォローアップが必要である。

B 地域においては、交流型研修会への参加者の中にメンターとしての養成研修を受講していない者、また、メンターとして登録して以降、フォローアップ研修が実施されていなかったため、相談支援活動を行う上で必要となる発達障害やメンターの役割、相談時の基本姿勢や留意点等に関する基本事項を講義動画やオンライン講義を通して学習した。これらの内容については、参考になったとの肯定的な評価が得られており、参加者のニーズを満たしたものであった。特に講義とメンター同士の意見交換を組み合わせた回では、「とても参考になった」との高評価が示された。このことから、一方的な知識や情報の伝達で終始するのではなく、メンター同士での話し合いを通して相互に疑問点を確認したり、他のメンターの考えに触れたりすることが、メンターにとっては有益な研修になると考えられる。

メンター同士が交流することの意義について、A 地域では意義があると評価している参加者が大部分であった。交流型研修会の満足度を尋ねた B 地域についても、全体的に満足感が得られている結果であった。意義がある、または、満足しているとの評価が高かった回は、A 地域では現役のメンターによる事例発表を行った第 2 回目の研修、B 地域ではメンター同士で地域の支援リソースを出し合った研修であった。日々の相談支援活動に直結する内容を取り上げると、より研修会を行うことの意義や満足感が高まることがうかがえた。初回の事後アンケートで他の地域のメンターとの交流を要望する声が挙がっていたが、特定のテーマを設定しての協議や演習的な活動と自由に情報・意見交換を行うこととのバランスをとった企画が必要である。

交流型研修会実施当初は、オンラインの使用に戸惑う参加者が見られたが、回が進むにつれて使用に慣れ、オンラインの利点を実感している参加者が見られるようになった。移動時間がなく、経済性があり、どの場所に住んでいても自分の都合に合わせて参加できる、様々な地域のメンターと容易につながることのできるメリットがオンラインにはある。しかし、自由度が高く融通が利くからこそ研修会に参加する動機付けが根底にないと、そのメリットは生かされない。メンター事業を持続可能な取組にするためにも、研修会への参加も含めたメンターの動機付けを高める工夫が一層求められる。

付記

本研究は、令和 2 ~ 6 年度科学研究費助成事業科学研究費補助金（基盤研究 B：一般）「地域と連携・協働したペアレント・メンターの持続的活動を支える研修プログラムの開発」（課題番号：20H01712）の助成を得て実施したものである。

謝辞

交流型研修会の企画・運営にご協力をいただきました研究協力地域のペアレント・メンター事業ご担当者と親の会の保護者の皆様、交流型研修会にご参加いただきました協力地域のペアレント・メンターの皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 東敦子・黒田美保：双方向オンラインシステム導入による関係性支援の可能性と課題—自閉スペクトラム症児の保護者を対象にしたオンラインによるペアレント・プログラムの実際. 臨床発達心理実践研究, 第 17 卷, p43-49, 2022.
- 原口英之・井上雅彦・山口穂菜美・神尾陽子：わが国におけるペアレント・メンターによる親支援活動の現状と今後の課題. 精神保健研究, 28, p49-56, 2015.
- 原口英之・加藤香・井上雅彦：わが国におけるペアレント・メンター養成研修の現状と今後の課題. 自閉症スペクトラム研究, 12(2), p63-67, 2015.
- 特定非営利法人日本ペアレント・メンター研究会：平成 30 年度障害者総合福祉推進事業「ペアレント・メンター養成と活動支援ガイドラインの作成に関する調査」報告書, 2018.